

公正な態度で読者の自由な判断に役立てる記事づくりに励まない朝日

朝日の5月20日付朝刊記事が省略したとされる部分もつないで、原文どおりにすると、以下のようになる。(太字の箇所が省略したとされる部分)

「本当は私、2F(福島第二原発)に行けと言っていないんですよ。ここがまた伝言ゲームのあれのところで、行くとしたら2Fかという話をやっていて、退避をして、車を用意してという話をしたら、伝言した人間は、運転手に、福島第二に行けという指示をしたんです。福島第一の近辺で、所内にかかわらず、線量が低いようなところに1回退避して次の指示を待てと言ったつもりなんですが、2Fに着いた後、連絡をして、まずはGM(グループマネジャー)から帰ってきてということになったわけです。」「よく考えれば2Fに行った方がはるかに正しいと思ったわけです。」

この吉田証言からは、朝日記事が主張するような「命令違反し撤退」はどう考えても読みとれない。ここでは退避場所として吉田所長は2Fではない、「線量が低い」「福島第一の近辺」と考えていたつもりが、「伝言した人間は、運転手に、福島第二に行けという指示をし」て、そうなってしまった。しかし、退避するなら、「よく考えれば2Fに行った方がはるかに正しいと思った」と証言されているだけで、吉田所長に逆らって「命令違反」したとか、退避を越えて「撤退」したという読解が出てくる余地はない。ところが、朝日記事のように太字の箇所を省略すれば、確かに吉田所長の退避指示とは異なって所員たちは勝手に2Fに行ってしまったと読みとれる。

問題点を押さえると、650名の所員は吉田所長の退避指示とは異なる2Fに行ってしまったが、それが「命令違反」に相当したのかどうか、あるいは伝達の食い違いにすぎなかったのかどうか、であろう。吉田所長が「命令違反」だと考えていたのであれば、それは「命令違反し撤退」と受けとめられるが、しかし、吉田所長には「命令違反」の認識は全くなかったし、2Fに行った所員のほうもその認識は全くなかった。吉田所長にも所員にも双方に「命令違反」の認識がなくても、客観的にみれば、それは「命令違反し撤退」の行為に相当するということがありうるかもしれない。その場合の客観性とは、650名の所員が吉田所長の退避指示とは異なる2Fに行ってしまったことによって、原発事故への対応に支障が生じたのかどうかによって判断されなくてはならない。

朝日の5月20日付朝刊記事では、「その後、放射線量は急上昇しており、事故対応が不十分になった可能性がある」などと報じられたが、あくまでも推測の域を出ない。それ以外のどのような対応の手落ちがあったのか、を朝日が具体的に指摘しないかぎり、朝日の嫌がる同じ中傷にしかすぎなくなる。原発事故への対応作業は現場に従事する作業員たちの手に委ねられていたし、我々としてはそれを見守る以外の術はなかった。現場の指揮官と現場作業員たちとのチームワークがすべてであった。現場の混乱による少々の手違いがあっても、吉田所長が自分の退避指示とは異なる所員の2Fへの退避を「よく考えれば2Fに行った方がはるかに正しいと思ったわけです。」と事後であれ、判断したのであれば、それでよかったのであり、だからこそ2Fに着いたときの所員からの一報に1Fに残った吉田所長ら全員が率直に喜んだのではなかったか。

そのように記述されている「吉田調書」を目にしても、朝日がなおも釈然とせずに「命令違反し撤退」に固執していたのであれば、その事実を裏付ける決定的な証拠は、2Fに退避した所員たちはその後1Fに戻らずに帰宅したのかどうかによって明らかとなるであろう。彼らが帰宅して二度と1Fに戻らず、1Fに残った5、60名の作業員たちが困り果てたという報道も、彼らもやる気をなくして現場離脱を図ろうとしていたというニュースも、その当時目にしたり、耳にした記憶もない。報告では、吉田所長の「発言の評価を誤り、十分な検討を怠っていた。」としているが、確かに疑問の余地なく朝日は「発言の評価を誤」った。しかし、なにが「発言の評価を誤」らせたのか、そこが徹底的に問われなくてはならない。

「発言の評価の誤り」だけでなく、朝日の記事の書き方にも大きな疑問が湧いてくる。それは次の報告に浮き彫りにされている。

「一方、所員が福島第二原発に移った行動について、吉田所長は聴取に退避と説明し、「撤退」とは言っていない。

福島第一原発構内への移動ならば、すぐに現場に戻れる。ただ、10*離れた福島第二に移動したならば、地震で交通状態が悪いこともあり、福島第一の現場へは短時間で戻れない。福島第二に移動した所員の大半がすぐには戻れない状態になったことについて、取材班は退避を「撤退」と記した。

だが、「所長命令に違反」し、原発から「撤退」したと表現したことで、所員らが「命令」を知りつつ逃げたという印象を強める結果になった。」

いまようやく気づいたが、朝日のいう「命令違反」とはあくまでも吉田所長の退避指示とは異なる（背く）所員の2Fへの退避を指しており、「撤退」とは2Fへの移動によって「所員の大半がすぐには戻れない状態になったこと」を指しているだけであり、彼らがやがて帰宅してもう二度と1Fに戻ってこなくなるとかの、我々が考える「撤退」のイメージとは全く異なることである。要するに、そのピンポイントでの所員の対応をもって、「命令違反し撤退」を主張していたのだ。しかし、吉田所長の退避指示にしても、それとは異なる所員たちの行動にしても、そのときの瞬間を切り取って理解することは不可能であり、吉田所長の退避指示がたどっていく過程を通じてしか理解できないであろうから、朝日のその場面における事実のみを切り取って判断することは、フィクション性を帯びてむしろ真実から遠ざかるといわねばならない。

上記の報告で朝日は、「吉田所長は聴取に退避と説明し、「撤退」とは言っていない」ことをよく知りながら、所員の2Fへの移動については「取材班は退避を「撤退」と記した」としている。つまり、退避という用語よりも「撤退」という用語のほうが的確だから、取材班は訂正したと言っているのだ。もちろん、この訂正は改ざんに相当する。なぜなら、勝手に訂正したことを読者に伝えないままであれば、読者は「撤退」という用語をけっして使わなかった吉田所長のことを知らずに、吉田所長が「撤退」という用語を使って指示していたかのようにみえるからだ。

679号で「吉田調書」の内容をスクープした5・20朝日の編集記事について、撤退と退避という用語に注目しながら検証してきたが、その中からピックアップしてみる。

「吉田氏からの深刻な報告に、東電本店は**撤退**準備を急いだ。福島第二原発への**撤退**のタイミングなどを盛り込んだ「**退避**基準」の作成や、緊急時対策室を第二原発へ移す検討を始めた。」

（吉田所長からの撤退という深刻な報告として読者は受けとめないだろうか）

「吉田氏も事故対応とかかわりの少ない人の**撤退**には動いた。」

（吉田所長は撤退に動いたとしか読めない）

「福島第二への**撤退**準備は着実に進んでいた。後はタイミングだった。」

（2Fへの退避準備を撤退準備へと上書き）

「現場へすぐに引き返せない第二原発への**撤退**ではなく、第一原発構内かその付近の比較的線量の低い場所に待機して様子を見ることを決断し、命令した。」

（いかにも吉田所長が2Fへの移動を撤退と判断していたかのように思わせる）

「ところが、その待機命令に反して所員の9割が第二原発へ**撤退**した。」

（吉田所長の判断を取材班の判断に上書き）

「東電広報部は、第二原発に**撤退**した中にGMがいたことを認めた……」

撤退と退避（一つだけ）という用語を太字にしたが、断わっておくと、その編集記事では当然ながら、吉田所長の「」内の発言箇所や東電の内部資料からの引用箇所ですべて使われている退避という用語が撤退の用語に訂正されているということはない。しかし、撤退の用語の使われかたは上記にみられるとおりである。（）内にこちらのコメントを挿入したが、撤退の用語の不正な使われかたを感じないだろうか。一例として挙げれば、「吉田氏も事故対応とかかわりの少ない人の**撤退**には動いた。」という記述を読めば、吉田所長は本当は撤退ではなく退避を考えていたのに、そのことは覆い隠されたまま、吉田所長が撤退を判断していたとしかどうしても読みとることができない。つまり、吉田所長は撤退を判断していたというように、読者をミスリードしていくことになるのである。

吉田所長の退避という言葉は撤退という言葉に等しいと判断したので、「取材班は退避を「撤退」と記した」としても、「吉田所長は聴取に退避と説明し、「撤退」とは言っていない」ことを読者に伝える努力を最大限払わなければならなかった。そうでなければ、吉田所長の発言に対してとてもフェアな態度とはいえなかった。どうして公正な態度をもって読者の自由な判断に役立てるような記事づくりに励もうとしないのだろうか。